

平成12年度厚生科学研究費補助金(特定疾患対策研究事業)採択課題一覧

単位:千円

No.	課題番号	開始	終了	主任研究者	所属施設	職名	研究課題名	交付額
1	H11-特疾-01	11	13	小峰 光博	昭和大学藤が丘病院内科血液	教授	特発性造血腫瘍に関する研究	48,000
2	H11-特疾-02	11	13	中川 雅夫	京都府立医科大学第2内科学	教授	血液凝固異常症に関する調査研究	30,000
3	H11-特疾-03	11	13	小宮山 淳	信州大学医学部小児科	教授	原発性免疫不全症候群に関する調査研究	30,000
4	H11-特疾-04	11	13	橋本 博史	順天堂大学医学部膠原病内科	教授	難治性血管炎に関する調査研究	45,000
5	H11-特疾-05	11	13	小池 隆夫	北海道大学大学院医学研究科分子病態制御講座免疫病態内科学分野	教授	自己免疫疾患の病因・病態解析と新たな治療法の開発	45,000
6	H11-特疾-06	11	13	大野 重昭	北海道大学大学院医学研究科	教授	ペーチェット病に関する調査研究	30,000
7	H11-特疾-07	11	13	清野 佳紀	岡山大学医学部	教授	ホルモン受容体異常に関する研究	33,000
8	H11-特疾-08	11	13	加藤 謙	鳥取医科大学医学部内科学第一	教授	間脳下垂体機能障害に関する調査研究	21,000
9	H11-特疾-09	11	13	宮地 幸隆	東邦大学医学部第二内科	教授	副腎ホルモン産生異常に関する研究	31,000
10	H11-特疾-10	11	13	中尾 一和	京都大学大学院医学研究科臨床病態科学講座	教授	中枢性摂食異常症に関する調査研究	22,000
11	H11-特疾-11	11	13	北 徹	京都大学医学研究科	教授	原発性高血圧症に関する調査研究	25,000
12	H11-特疾-12	11	13	池田 健一	信州大学医学部第三内科	教授	アミロイドーシスに関する研究	34,000
13	H11-特疾-13	11	13	北本 哲之	東北大学大学院医学系研究科病態神経学分野	教授	遅発性ウイルス感染に関する調査研究	65,000
14	H11-特疾-14	11	13	辻 省次	新潟大学脳研究所神経内科	教授	運動失調に関する調査及び病態機序に関する研究	39,500
15	H11-特疾-15	11	13	田代 邦雄	北海道大学大学院医学研究科脳科学専攻 神経内科学	教授	神経変性疾患に関する研究	44,000
16	H11-特疾-16	11	13	納 光弘	鹿児島大学医学部第三内科	教授	免疫性神経疾患に関する調査研究	44,000
17	H11-特疾-17	11	13	山崎 麻美	国立大阪病院脳神経外科	医長	先天性水頭症の分子生物学的メカニズム解明と治療法開発	18,000
18	H11-特疾-18	11	13	吉本 高志	東北大学大学院医学系研究科	教授	ワイルス動脈腫瘍の病因・病態に関する研究	30,000
19	H11-特疾-19	11	13	玉井 信	東北大学医学部眼科	教授	網膜脈絡膜・視神経萎縮症に関する調査研究	31,000
20	H11-特疾-20	11	13	八木 聡明	日本医科大学耳鼻咽喉科学教室	教授	前庭機能異常に関する調査研究	25,000
21	H11-特疾-21	11	13	星野 知之	浜松医科大学耳鼻咽喉科	教授	急性高度難聴に関する調査研究	25,000
22	H11-特疾-22	11	13	栗山 寛成	京都大学医学研究科循環器病態学	教授	特発性心拍速に関する調査研究	47,000
23	H11-特疾-23	11	13	工藤 翔二	日本医科大学第四内科	教授	びまん性肺疾患に関する調査研究	30,000
24	H11-特疾-24	11	13	栗山 喬之	千葉大学医学部肺病研究施設第二臨床研究部門	教授	呼吸不全に関する調査研究	30,000
25	H11-特疾-25	11	13	山田 孝	兵庫県立大学第4内科	教授	難治性炎症性腸管障害に関する調査研究	30,000
26	H11-特疾-26	11	13	戸田 剛太郎	東京慈恵会医科大学内科学講座第1	教授	難治性の肝疾患に関する研究	30,000
27	H11-特疾-27	11	13	杉野 圭蔵	九州大学大学院医学研究科	教授	門脈血行異常症に関する調査研究	20,000
28	H11-特疾-28	11	13	三村 雄次	名古屋大学医学部第1外科	教授	肝内結石症調査研究班	14,000
29	H11-特疾-29	11	13	小川 道雄	熊本大学医学部第二外科	教授	難治性腸疾患に関する調査研究	24,000
30	H11-特疾-30	11	13	小川 秀典	順天堂大学医学部皮膚科	教授	播多難治性皮膚疾患	30,000
31	H11-特疾-31	11	13	新海 宏	千葉大学医学部皮膚科	教授	強皮症調査研究	21,000
32	H11-特疾-32	11	13	近藤 啓文	北里大学医学部	診療教授	混合性結合組織病の病態、治療と抗U1RNP抗体に関する研究	30,000
33	H11-特疾-33	11	13	大塚 隆男	筑波大学臨床医学系皮膚科	教授	神経皮膚症候群の新しい治療法の開発と治療指針作成に関する研究	24,000
34	H11-特疾-34	11	13	原田 隆行	弘前大学医学部整形外科	教授	骨髄炎常化症に関する調査研究	40,000
35	H11-特疾-35	11	13	高岡 邦夫	信州大学医学部整形外科	教授	特発性大腿骨頭壊死症の予防を目的とした疫学的病態生理学的遺伝学的総合的研究	35,000
36	H11-特疾-36	11	13	堺 秀人	東海大学医学部内科	教授	進行性腎障害に関する調査研究	32,000
37	H11-特疾-37	11	13	岩下 宏	国立療養所須磨病院	院長	スモンに関する調査研究	84,000
38	H11-特疾-38	11	13	倉田 敏	国立感染症研究所	副所長	特定疾患の微生物学的原因究明に関する研究	38,000
39	H11-特疾-39	11	13	山本 一彦	東京大学大学院医学系研究科内科学専攻	教授	特定疾患対策のための免疫学的手法の開発に関する研究	34,000
40	H11-特疾-40	11	13	永井 良三	東京大学大学院医学研究科循環器内科学	教授	特定疾患の分子病態の解明に関する研究	36,000
41	H11-特疾-41	11	13	天谷 雅行	慶應義塾大学医学部皮膚科	専任講師	自己抗原ノックアウトマウスを用いた自己免疫モデルの開発に関する研究	25,000
42	H11-特疾-42	11	13	油谷 浩幸	東京大学先端科学技術研究センターゲノムサイエンス部門	助教	希少性疾患における遺伝子発現変異の包括的解析のための遺伝子発現データベースの構築に関する研究	40,000
43	H11-特疾-43	11	13	稲葉 裕	順天堂大学医学部衛生学教室	教授	特定疾患の疫学に関する研究	40,000
44	H11-特疾-44	11	13	福原 俊一	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻臨床疫学分野	教授	特定疾患患者の生活の質(Quality of Life, QOL)の判定手法の開発に関する研究	24,000
45	H11-特疾-45	11	13	福原 信隆	国立療養所須磨病院	副院長	特定疾患患者の生活の質(Quality of Life, QOL)の向上に関する研究	27,500
46	H11-特疾-46	11	13	杉田 統	東邦大学医学部衛生学教室	教授	特定疾患対策対象疾患の経団に関する研究	20,000
47	H11-特疾-47	11	13	木村 裕	国立療養所山形病院	院長	特定疾患対策の地域支援ネットワークの構築に関する研究	33,000
48	H11-特疾-48	11	13	清野 裕	京都大学大学院医学研究科病態代謝学講座	教授	特定疾患に関する評価研究班	35,200
49	H11-特疾-49	11	13	辻 省次	新潟大学脳研究所神経内科	教授	副腎白質ジストロフィーの治療法開発のための臨床的及び基礎的研究	27,000
50	H11-特疾-50	11	13	石原 徳博	山口大学医学部病理学第一講座	教授	アミロイドーシスモデル動物における発症機序の解明に関する研究	20,000
51	H11-特疾-51	11	12	湯浅 龍彦	国立精神・神経センター国府台病院神経内科	部長	パーキンソン病の定位脳手術の適応と手技の確立に関する多施設共同研究	20,000
52	H11-特疾-52	11	12	工藤 翔二	日本医科大学内科学第4講座	教授	特発性間質性肺炎の細胞分子病態に基づく疾病の病態に応じた治療法の開発研究	13,000
53	H11-特疾-53	11	12	小川 道雄	熊本大学医学部第二外科	教授	重症急性膵炎の救命率を改善するための研究	20,000
54	H11-特疾-54	11	12	米田 正始	京都大学大学院医学研究科	教授	特発性拡張型心筋症の重症例に対するパルス手術の有効性評価に関する臨床研究	10,800
55	H11-特疾-55	11	12	片峰 茂	長崎大学大学院医学研究科	教授	家族性プリオン病及び外因性プリオン病の発症遅延策に関する介入研究	24,000
56	H11-特疾-56	11	12	溝口 秀昭	東京女子医科大学血液内科	教授	再生不良性貧血について治療薬の組み合わせを評価する多施設共同研究	17,500
57	H11-特疾-57	11	12	丸山 征郎	鹿児島大学医学部臨床検査医学	教授	原因不明の血球が原因となる難治性疾患の機序的研究	23,000
58	H11-特疾-58	11	12	内木 宏延	福井医科大学医学部病理学第二講座	教授	試験管内ALアミロイド線維形成機構の反応速度論モデルの開発、および生理的複合阻害分子並びに非ペプチド性複合阻害剤	5,000
59	H11-特疾-59	11	12	小池 隆夫	北海道大学大学院医学研究科分子病態制御講座免疫病態内科学分野	教授	SLEにおける難治性病態の早期診断と治療研究	18,000
60	H11-特疾-60	11	12	栗山 喬之	千葉大学医学部肺病研究施設第二臨床研究部門	教授	特定疾患に伴う肺高血圧症の発症機序の解明と内科的治療指針確立を目指す診療科横断的研究	30,000
61	H11-特疾-61	11	12	玉井 信	東北大学医学部眼科	教授	加齢性黄斑変性症に対する低用量放射線治療、光凝固法の効果に関する多施設共同研究	38,000
62	H11-特疾-62	11	12	下山 幸	兵庫県立大学第四内科	教授	炎症性腸疾患に対する白血球除去・吸着療法の効果に関する多施設共同研究	12,000
63	H12-特疾-01	12	13	糸山 泰人	東北大学大学院医学系研究科神経内科	教授	筋萎縮性側索硬化症の病態の解明と治療に関する研究	20,000
64	H12-特疾-02	12	13	今井 尚志	国立療養所千葉東病院	医長	筋萎縮性側索硬化症の病態の診療指針作成に関する研究	10,000
65	H12-特疾-03	12	13	林 松彦	慶應義塾大学医学部内科学	助教	進行性腎障害に対する進展の抑制に関する研究—腎糸球体及び尿管細胞再生の腎疾患治療への応用—	
66	H12-特疾-04	12	13	名取 泰博	国立国際医療センター研究所臨床系研究部	部長	白血球浸潤を標的とした進行性腎障害の進展抑制に関する研究	20,000
67	H12-特疾-05	12	13	金澤 一郎	東京大学大学院医学系研究科	教授	脳磁気刺激による神経痛治療の開発的研究	20,000

平成13年度厚生科学研究費補助金(特定疾患対策研究事業)採択課題一覧

単位:千円

No.	課題番号	開始	終了	主任研究者	所属施設	職名	研究課題名	交付額
1	H11-特疾-01	11	13	小嶋 光博	昭和大学藤が丘病院	教授	特異性造血腫瘍に関する研究	48,000
2	H11-特疾-02	11	13	中川 雅夫	京都府立医科大学	教授	血液凝固異常に関する調査研究	30,000
3	H11-特疾-03	11	13	小宮山 洋	信州大学医学部	教授	原発性免疫不全症候群に関する調査研究	27,000
4	H11-特疾-04	11	13	橋本 博史	順天堂大学医学部	教授	難治性血管炎に関する調査研究	45,000
5	H11-特疾-05	11	13	小池 隆夫	北海道大学医学部	教授	自己免疫疾患の病因・病態解析と新たな治療法の開発	45,000
6	H11-特疾-06	11	13	大野 豊昭	北海道大学医学部	教授	ペーアット病に関する調査研究	30,000
7	H11-特疾-07	11	13	清野 佳紀	岡山大学医学部	教授	ホルモン受容体異常に関する研究	33,000
8	H11-特疾-08	11	13	加藤 謙	鳥栖医科大学	教授	副腎下垂性機能障害に関する調査研究	21,000
9	H11-特疾-09	11	13	宮地 幸隆	東邦大学医学部	教授	副腎ホルモンの産生異常に関する研究	31,000
10	H11-特疾-10	11	13	中尾 一和	京都大学医学部	教授	中枢性摂食異常に関する調査研究	20,000
11	H11-特疾-11	11	13	北本 智之	京都大学医学部	教授	原発性高脂血症に関する調査研究	25,000
12	H11-特疾-12	11	13	津田 修一	信州大学医学部	教授	アミロイドーシスに関する研究	30,000
13	H11-特疾-13	11	13	北本 智之	東北大学医学部	教授	遷移性ウイルス感染に関する調査研究	71,000
14	H11-特疾-14	11	13	辻 省次	新潟大学脳研究所	教授	運動失調に関する調査及び病態機序に関する研究	42,500
15	H11-特疾-15	11	13	田代 邦雄	北海道大学医学部	教授	神経変性疾患に関する研究	33,000
16	H11-特疾-16	11	13	納 光弘	鹿児島大学医学部	教授	免疫性神経疾患に関する調査研究	47,000
17	H11-特疾-17	11	13	山崎 康孝	国立大阪病院	院長	先天性水頭症の分子生物学的メカニズム解明と治療法開発	16,000
18	H11-特疾-18	11	13	吉本 高志	東北大学医学部	教授	ウイルス動脈腫瘍症の病因・病態に関する研究	27,000
19	H11-特疾-19	11	13	玉井 慎	東北大学医学部	教授	網膜脈絡膜・視神経萎縮症に関する調査研究	31,000
20	H11-特疾-20	11	13	八木 聡明	日本医科大学	教授	前庭機能異常に関する調査研究	25,000
21	H11-特疾-21	11	13	星野 知之	浜松医科大学	教授	急性高度難聴に関する調査研究	25,000
22	H11-特疾-22	11	13	藤山 夏蔵	京都大学医学部	教授	特異性心筋症に関する調査研究	47,000
23	H11-特疾-23	11	13	工藤 翔二	日本医科大学	教授	びまん性前炎に関する調査研究	30,000
24	H11-特疾-24	11	13	藤山 喬之	千葉大学医学部	教授	呼吸不全に関する調査研究	30,000
25	H11-特疾-25	11	13	下山 孝	兵庫医科大学	教授	難治性炎症性腸管障害に関する調査研究	30,000
26	H11-特疾-26	11	13	戸田 剛太郎	東京慈恵会医科大学	教授	難治性の肝疾患に関する研究	33,000
27	H11-特疾-27	11	13	杉野 幸雄	九州大学医学部	教授	門脈血行異常症に関する調査研究	20,000
28	H11-特疾-28	11	13	二村 雄次	名古屋大学医学部	教授	肝内結石症調査研究班	10,000
29	H11-特疾-29	11	13	小川 道雄	熊本大学医学部	教授	難治性腸疾患に関する調査研究	24,000
30	H11-特疾-30	11	13	小川 秀典	順天堂大学医学部	教授	播種性皮膚病に関する調査研究	36,000
31	H11-特疾-31	11	13	新瀬 誠	千葉大学医学部	教授	遠位性腸管炎に関する調査研究	21,000
32	H11-特疾-32	11	13	近藤 啓文	北里大学医学部	院長	混合性結合組織病の病態、治療と抗U1RNP抗体に関する研究	27,000
33	H11-特疾-33	11	13	大塚 勇男	筑波大学	教授	神経皮膚症候群の新しい治療法の開発と治療剤作成に関する研究	24,000
34	H11-特疾-34	11	13	原田 征行	青森県立中央病院	院長	寛鬆軟骨化症に関する調査研究	40,000
35	H11-特疾-35	11	13	高岡 邦夫	信州大学医学部	教授	特異性大腸骨髄腫死症の予防を目的とした疫学的病態生理学的遺伝学的総合研究	35,000
36	H11-特疾-36	11	13	塚 秀人	東海大学医学部	教授	進行性腎障害に関する調査研究	34,000
37	H11-特疾-37	11	13	嵐下 宏	国立療養所筑波病院	院長	スモンに関する調査研究	84,000
38	H11-特疾-38	11	13	津田 敏	国立感染症研究所	部長	特定疾患の疫学的原因究明に関する研究	34,000
39	H11-特疾-39	11	13	山本 一彦	東京大学	教授	特定疾患対策のための疫学的手法の開発に関する研究	34,000
40	H11-特疾-40	11	13	永井 良三	東京大学	教授	特定疾患の分子病態の解明に関する研究	38,000
41	H11-特疾-41	11	13	天谷 雅行	慶応大学医学部	講師	自己抗原ノックアウトマウスを用いた自己免疫モデルの開発に関する研究	27,000
42	H11-特疾-42	11	13	油谷 浩幸	東京大学先端科学技術センター	助教授	希少性疾患における遺伝子発現異常の包括的解析のための遺伝子発現データベースの構築に関する研究	40,000
43	H11-特疾-43	11	13	福原 裕	順天堂大学医学部	教授	特定疾患の疫学に関する研究	46,000
44	H11-特疾-44	11	13	福原 裕	京都大学大学院医学研究科	教授	特定疾患患者の生活の質(Quality of Life, QOL)の判定手法の開発に関する研究	31,100
45	H11-特疾-45	11	13	福原 信雄	国立療養所厚労病院	副院長	特定疾患患者の生活の質(Quality of Life, QOL)の向上に関する研究	27,500
46	H11-特疾-46	11	13	杉田 裕	東邦大学医学部	教授	特定疾患対策対象疾患の評価に関する研究	5,000
47	H11-特疾-47	11	13	木村 裕	国立療養所山形病院	教授	特定疾患対策の地域支援ネットワークの構築に関する研究	38,000
48	H11-特疾-48	11	13	清野 裕	京都大学医学部	教授	特定疾患に関する評価研究班	28,670
54	H11-特疾-49	11	13	辻 省次	新潟大学脳研究所	教授	副腎白質ジストロフィーの治療法開発のための臨床的及び基礎的研究	27,000
55	H11-特疾-50	11	13	石原 博博	山口大学医学部	教授	アミロイドーシスモデル動物における免疫機序の解明に関する研究	18,000
49	H12-特疾-01	12	13	糸山 泰人	東北大学大学院医学研究科神経内科	教授	筋萎縮性側索硬化症の病態の解明と治療に関する研究	22,000
50	H12-特疾-02	12	13	今井 尚志	国立療養所千葉東病院	院長	筋萎縮性側索硬化症の病態の診断指針作成に関する研究	10,000
51	H12-特疾-03	12	13	林 松彦	慶応大学	助教授	進行性腎障害に対する進展の抑制に関する研究—腎糸球体及び尿細管細胞増生の腎疾患治療への応用—	20,000
52	H12-特疾-04	12	13	名取 恭博	国立国際医療センター研究所	部長	白血球浸潤を標的とした進行性腎障害の進展抑制に関する研究	18,000
53	H12-特疾-05	12	13	金澤 一郎	東京大学大学院	教授	脳神経障害による神経経路治療の開発的研究	22,000
56	H13-特疾-01	13	15	鈴木 和男	国立感染症研究所	室長	難治性血管炎に伴う多臓器不全に係る病態の解明および治療法の開発に関する研究	24,000
57	H13-特疾-02	13	15	清水 宏	北海道大学大学院医学研究科	教授	重症型先天性表皮水疱症に対する自己培養皮膚移植法の開発に関する研究	24,000
58	H13-特疾-03	13	15	橋本 公二	愛媛大学医学部	教授	難治性皮膚疾患に対する自己培養皮膚移植法の開発に関する研究	32,000
59	H13-特疾-04	13	15	平井 久丸	東京大学医学部付属病院	助教授	骨髄異形成症候群に対する新規治療法の開発に関する研究	35,200
60	H13-特疾-05	13	15	目井 紀文	慶応義塾大学医学部	教授	粘膜炎を伴った新しい炎症性腸疾患治療法の開発	28,000
61	H13-特疾-06	13	15	土肥 多美子	国立国際医療センター研究所	研究部長	炎症性腸疾患の予後改善を目指した消化管上皮細胞回転の研究	5,000
62	H13-特疾-07	13	15	金子 清俊	国立精神・神経センター神経研究所	部長	硬膜移植後プリオン病に対する進行阻止法の開発に関する基礎研究	34,200
63	H13-特疾-08	13	15	山村 隆	国立精神・神経センター神経研究所	部長	多発性硬化症に対するインターフェロン療法の効果の発現及びその持続性に関する要因等の解析に関する研究	26,250
64	H13-特疾-09	13	15	桜川 宣男	国立精神・神経センター神経研究所	部長	ライソゾーム病の病態の解明及び治療法の開発に関する研究	32,000
65	H13-特疾-10	13	15	齋藤 龍樹	東京慈恵会医科大学	教授	ライソゾーム病の病態の解明及び治療法の開発に関する研究	23,580

平成14年度厚生労働科学研究費補助金(特定疾患対策研究事業)採択課題一覧

単位:千円

No.	課題番号	開始	終了	主任研究者	所属施設	職名	研究課題名	直接経費	間接経費	交付額
1	H14-特疾-01	14	16	小峰光博	昭和大学麻が丘病院内科血液	教授	特異性造血腫瘍に関する調査研究	48,000	9,000	58,000
2	H14-特疾-02	14	16	池田康夫	慶應義塾大学医学部	総合医科学研究センター長・内科学教授	血液凝固異常症に関する調査研究	31,000	0	31,000
3	H14-特疾-03	14	16	宮脇利男	富山医科大学医学部小児科	教授	原発性免疫不全症候群に関する調査研究	29,000	0	29,000
4	H14-特疾-04	14	16	尾崎承一	聖マリアンナ医科大学リウマチ・膠原病・アレルギー内科	教授	難治性血管炎に関する調査研究	52,000	8,400	60,400
5	H14-特疾-05	14	16	小池隆夫	北海道大学大学院医学研究科分子病態制御講座・第二内科	教授	自己免疫疾患に関する調査研究	46,500	8,000	54,500
6	H14-特疾-06	14	16	金子史男	福島県立医科大学医学部	教授	ペーチェット病に関する調査研究	29,000	0	29,000
7	H14-特疾-07	14	16	清野佳紀	岡山大学大学院医学部総合研究科	文部科学教官・教授	ホルモン受容体機能異常に関する調査研究	30,000	0	30,000
8	H14-特疾-08	14	16	千原和夫	神戸大学大学院医学系研究科(応用分子医学講座)	教授	間脳下垂体機能障害に関する調査研究	20,000	0	20,000
9	H14-特疾-09	14	16	宮地幸隆	東邦大学医学部第一内科	教授	副腎ホルモン産生異常に関する研究	25,000	0	25,000
10	H14-特疾-10	14	16	芝崎 保	日本医科大学生理学第二	教授	中性性高脂血症に関する調査研究	20,000	0	20,000
11	H14-特疾-11	14	16	斎藤 康	千葉大学大学院医学研究科	教授	原発性高脂血症に関する調査研究	20,000	0	20,000
12	H14-特疾-12	14	16	池田修一	信州大学医学部第三内科	教授	アミロイド病に関する調査研究	34,000	6,000	40,000
13	H14-特疾-13	14	16	水澤英洋	東京医科大学大学院医学部総合研究科脳神経機能病態学分野	教授	プリオン病及び遅発性ウイルス感染に関する調査研究	80,000	14,000	94,000
14	H14-特疾-14	14	16	辻 省次	新潟大学脳研究所神経内科	教授	運動失調に関する調査及び病態機序に関する研究	65,000	11,000	76,000
15	H14-特疾-15	14	16	葛原茂樹	三重大学医学部神経内科学講座	文部科学教官・教授	神経変性疾患に関する調査研究	40,000	6,000	46,000
16	H14-特疾-16	14	16	吉良潤一	九州大学大学院医学研究科神経内科学	文部科学教官・教授	免疫性神経疾患に関する調査研究	51,500	9,000	60,500
17	H14-特疾-17	14	16	山崎麻美	国立大阪病院(脳神経外科)	部長	先天性水頭症に関する調査研究:分子遺伝子学アプローチによる診断基準・治療指針の策定と予防法・治療法の開発	15,000	0	15,000
18	H14-特疾-18	14	16	吉本高志	東北大学大学院医学研究科	医学部長・神経外科学分野	モヤモヤ病(ウイルス動脈輪閉塞症)に関する調査研究	29,000	0	29,000
19	H14-特疾-19	14	16	石橋建朗	九州大学大学院医学研究科眼科学分野	教授	網膜脈絡膜・視神経萎縮症に関する調査研究	39,000	7,000	46,000
20	H14-特疾-20	14	16	高橋正純	東海大学医学部(耳鼻咽喉科学教室)	主任教授	前庭機能異常に関する調査研究	20,000	0	20,000
21	H14-特疾-21	14	16	喜多村健	東京医科歯科大学・大学院医学部総合研究科	教授	急性高度難聴に関する調査研究	20,000	0	20,000
22	H14-特疾-22	14	16	北島 頌	北海道大学大学院医学研究科	教授	特異性心筋症に関する調査研究	46,500	8,000	54,500
23	H14-特疾-23	14	16	貫和敏博	東北大学(加齢医学研究所)	文部科学教官・教授	びまん性筋疾患に関する調査研究	31,500	0	31,500
24	H14-特疾-24	14	16	久保重嗣	信州大学医学部内科学第一教室	教授	呼吸不全に関する調査研究	31,500	0	31,500
25	H14-特疾-25	14	16	戸田剛太郎	東京慈恵会医科大学内科学講座消化器・肝臓内科	教授	難治性の肝疾患に関する調査研究	36,500	6,000	42,500
26	H14-特疾-26	14	16	横川 誠	九州大学大学院医学研究科災害救急医学	教授	門脈血行異常症に関する調査研究	24,000	0	24,000
27	H14-特疾-27	14	16	跡見 裕	杏林大学医学部第一外科	教授	肝内結石症に関する調査研究	10,000	0	10,000
28	H14-特疾-28	14	16	大槻 真	産業医科大学医学部	第三内科教授	難治性肝疾患に関する調査研究	24,000	0	24,000
29	H14-特疾-29	14	16	北島廣隆	岐阜大学医学部皮膚科	教授	稀少難治性皮膚疾患に関する調査研究	39,000	6,000	45,000
30	H14-特疾-30	14	16	竹原利彦	金沢大学大学院医学系研究科	教授	強皮症における病因解明と適切な治療法の開発	24,000	0	24,000
31	H14-特疾-31	14	16	近藤啓文	北里大学医学部	診療教授	混合性結合組織病の病態、治療と関連する遺伝的因子、自己抗体の研究	29,000	0	29,000
32	H14-特疾-32	14	16	中山樹一郎	福岡大学医学部皮膚科	教授	神経皮膚症候群に関する調査研究	24,000	0	24,000
33	H14-特疾-33	14	16	中村耕三	東京大学大学院医学系研究科整形外科学	教授	腎臓病骨化症に関する調査研究	41,500	7,000	48,500
34	H14-特疾-34	14	15	高岡邦夫	大阪市立大学大学院医学研究科整形外科学	整形外科学教授	特異性大動脈頭暈暈死症の予防を目的とした疫学的病態生理学的遺伝学的総合研究	34,000	6,000	40,000
35	H14-特疾-35	14	16	富野康己	順天堂大学医学部腎臓内科	教授	進行性腎障害に関する調査研究	30,000	6,000	36,000
36	H14-特疾-36	14	16	松岡康彦	国立療養所栗原古荘病院	院長	スモンに関する調査研究	84,000	16,800	100,800
37	H14-特疾-37	14	16	佐多徹太郎	国立感染症研究所(感染症管理部)	感染症管理部長	特定疾患の疫学的原因究明に関する研究	30,000	0	30,000
38	H14-特疾-38	14	16	北風政史	国立循環器病センター心臓血管内科	生理機能検査部長	HB-E/GPIにかかわる新規拡張型心筋症モデルマウスの作成とその治療薬開発に関する研究	30,000	6,000	36,000
39	H14-特疾-39	14	16	住田孝之	筑波大学臨床医学系内科(膠原病・リウマチ・アレルギー)	教授	特定疾患対策のための免疫学的手法の開発に関する研究	36,000	6,000	42,000
40	H14-特疾-40	14	16	天谷雅行	慶應義塾大学医学部皮膚科	専任講師	特定疾患に対する自己免疫モデル開発に関する研究	25,000	0	25,000
41	H14-特疾-41	14	16	油谷浩幸	東京大学国際・産学共同研究センター	教授	罹患組織における遺伝子発現プロファイル解析からの病因解明に関する研究	30,000	6,000	36,000
42	H14-特疾-42	14	16	福原 裕	順天堂大学医学部衛生学教室	教授	特定疾患の疫学に関する研究	40,000	8,000	48,000
43	H14-特疾-43	14	16	中島 孝	国立療養所厚労病院	神経内科医長、臨床研究部長	特定疾患の生活の質(Quality of Life, QOL)の向上に資するケアの在り方に関する研究	25,000	0	25,000
44	H14-特疾-44	14	16	福原俊一	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻理論疫学分野	教授	特定疾患のアウトカム研究: GOL, 介護負担, 経済評価	50,000	10,000	60,000
45	H14-特疾-45	14	16	木村 裕	国立療養所山形病院	院長	特定疾患の地域支援体制の構築に関する研究	35,000	7,000	42,000
46	H14-特疾-46	14	16	林 松彦	慶應義塾大学医学部	助教授	進行性腎障害に対する腎機能維持・回復療法に関する研究	36,000	7,200	43,200
47	H14-特疾-47	14	16	糸山康人	東北大学大学院医学系研究科神経内科	教授	筋萎縮性側索硬化症の病因・病態に關する新規治療法の開発に関する研究	25,000	0	25,000
48	H14-特疾-48	14	15	辻 真哉	産業医科大学医学部(神経内科)	教授	腎臓小腸管性症の病態的診断・治療法に関する研究	15,000	0	15,000
49	H14-特疾-49	14	16	坪田一男	東京医科大学市川総合病院	眼科学教授	涙腺の分化増殖機構の解明と再生医療への応用	15,000	0	15,000
50	H14-特疾-50	14	16	石原得博	山口大学医学部構造制御病態学講座	教授	アミロイド沈着による病的要素の検索に関する研究	20,000	0	20,000
51	H14-特疾-51	14	16	清野 裕	京都大学大学院医学研究科	教授	特定疾患対策研究の企画又は評価に関する研究	20,657	0	20,657
52	H13-特疾-01	13	15	鈴木 宏	国立感染症研究所	室長	難治性血管炎に伴う多臓器不全に係る病態の解明および治療法の開発に関する研究	24,000	0	24,000
53	H13-特疾-02	13	15	清水 和宏	北海道大学大学院医学研究科	教授	重症型先天性表皮水疱症に対する自己培養皮膚移植法の開発に関する研究	24,000	0	24,000
54	H13-特疾-03	13	15	橋本 公二	愛媛大学医学部	教授	難治性皮膚疾患に対する自己培養皮膚移植法の開発に関する研究	32,000	0	32,000
55	H13-特疾-04	13	15	平井 久丸	東京大学医学部付属病院	助教授	骨髄異形成症候群に対する新規治療法の開発に関する研究	35,200	0	35,200
56	H13-特疾-05	13	15	白比 紀文	慶應義塾大学医学部	教授	難治性炎症性腸管障害に関する調査研究	58,500	0	58,500
57	H13-特疾-07	13	15	金子 清哉	国立精神・神経センター神経研究所	部長	硬膜移植後プリオン病に対する進行阻止法の開発に関する基礎研究	34,000	0	34,000
58	H13-特疾-08	13	15	山村 隆	国立精神・神経センター神経研究所	部長	多発性硬化症に対するインターフェロン療法の効果の発現及びその持続性に関する要因等の解析に関する研究	26,250	0	26,250
59	H13-特疾-09	13	15	桜川 寛男	東邦大学医学部SRL代謝病再生医学寄付講座	客員教授	ライソゾーム病の病態の解明及び治療法の開発に関する研究	36,000	0	36,000
60	H13-特疾-10	13	15	衛藤 義勝	東京慈恵会医科大学	教授	ライソゾーム病の病態の解明及び治療法の開発に関する研究	23,580	0	23,580

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 ・期待される厚生労働行政に対する貢献度等。(事例により説明してください。審議委員資料、予算要求策定の基礎資料としての活用予定などをきむ。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	発表状況			特許 特許の出願及び取得状況	施策 反映件数	(4) 研究成果 が分かるホームページのURLなど
								原著論文(件)	その他論文(件)	口頭発表等(件)			
特異性造血障害に関する調査研究	平成11-13年度	148,900(千円)	昭和大学藤が丘病院内科	小峰 光博	再生不良性貧血(AA)では調査人数7,800例を集計し全国の実態を把握した。免疫抑制療法を前向きに評価し、再治療の安全性を確認した。微小PNH血球の高頻度検出の免疫学的意義を究明した。自己免疫性溶血性貧血(AHAI)の自己抗体が認識する自己抗原を特定し、発作性夜間ヘモグロビン尿症(PNH)では多数例の日本比較研究を行い病態・予後の相違を明らかにした。骨髄異形成症候群(MDS)または不応性貧血(RA)では、1000例の予後解析、多面的な分子病態の検討、低リスク病態の免疫抑制療法の前向き評価研究を実施した。骨髄移植(MF)の予後調査を行い規定因子と骨髄移植の実態を把握した。AAの免疫抑制療法と骨髄移植は国際水準を越す良好な成績を得、国際誌で高く評価され、平成11(1999)年に欧米専門家によるコンセンサス形成会議を東京で開催し結果をまとめた。病態発生におけるTリンパ球の関与は国際的に注目される。Fanconi 貧血の分子病態も着実に進展し評価も高い。AHAIの自己抗体としてIgG抗体エドトープの構造を解明した。PNHのPIG-A 変異の解明に引き続き分子病態研究は世界をリードしており、平成13(2001)年に国際シンポジウムを開催し、国際協力の途を開いた。MDSの分子病態は重点研究(平井)班と共同し多数の個別研究が国際誌に掲載された。MFの病態予後調査は内外に類をみない貴重な資料である。	再生不良性貧血(AA)の再発率と予後の相違を明らかにし、今後の行政施策立案の資料として有用性が高い。診断1年までは重症率65%、重症7%だが、5年までには25%、39%となるなど患者予後の改善が得られている。調査票の改訂により経過の把握がより的確となる。その他個々に挙げないが、各疾患の病態、治療、経過、治療詳細などはどれも血液腫瘍患者の福祉増進を目指す診療薬の基本資料として重要なものとなる。	AAに対する免疫抑制療法、造血細胞移植療法の評価と位置づけが定まり予後の改善に大きく寄与した。診断・重症度基準を厳重に集積されたエビデンスに基づいて治療指針の改訂を進めている。Fanconi 貧血の分子病態の解明は造血因子治療への道を開くと期待される。PNH研究は国際協力体制の確立へと寄与の幅を広げ、近く国際患者登録と新しい治療研究計画が提案される見通しである。不応性貧血に対する免疫抑制療法の評価が進められ、適応とともに治療体系の整理に役立つ。MFに対する骨髄移植の適応判定と薬物療法の開発を企図する。患者支援団体、腫瘍情報センター等を通じて各機関の相談に応じている。	英文408件、和文53件(計461件)	英文22件、和文187件(計209件)	口頭発表等58件(計267件)	0(出願、取得ともに該当なし)	3件(重点研究班の発足、治療研究見直しのヒアリング、AA診断・重症度・調査人数の改訂)	なし(研究班内の情報伝達のためのサイトは設けているが公開していない)
原発性免疫不全症候群に関する研究	平成11-13年度	81,000	福州大学 医学部	小宮山 淳	本研究班では、原発性免疫不全症候群の病態および責任遺伝子の解明、新しい診断法の開発、治療法の改良を行ってきた。世界で初めて、IgG2鎖ドメインの遺伝子変異(J Clin. Invest.)や二次感染欠損症の責任遺伝子(Blood)の同定を行い、Btk, WASP, SAP抗体を用いた前向き診断法を開発し、世界的に診断・治療に大きく貢献できた。	原発性免疫不全症候群重症度診断の策定のみならず、免疫不全患者の会からの要請を取り入れて、厚生労働行政に貢献できた。診断・治療法の改良は、いまだ原因不明で治療に難渋してきた患者のQOLを著しく向上させた。インターネット上に開設したホームページを活用し、患者や家族をはじめ医療関係者の相談に応じるとともに、原発性免疫不全症候群の診療レベルの向上に寄与できた。	測定された責任遺伝子の解析を疾患ごとに班員が分担し、全国から依頼された患者の遺伝子解析を依頼院に行うことができ、原発性免疫不全症候群の確定診断に寄与できた。	250	70	150	0	2件(治療研究における診断基準の見直しのヒアリング、調査人数の改訂)	免疫不全ホームページ: http://www.23ifep.esport.or.jp/smmunity/
難治性血管炎に関する調査研究	平成11-13年度	135,000	順天堂大学医学部 膠原病内科	橋本 博史	病態・病期に関する研究、抗好中球細胞質抗体(ANCA)に関する研究、大型血管炎、中・小型血管炎の臨床に関する研究を行った。 ア 研究目的の成果:血管炎モデル動物にて血管炎患者性遺伝子明らかにした。ANCA測定試薬の精度を明らかにした。重症難治性血管炎患者にHLA-DRB1*0801が多いことを明らかにした。全国疫学調査を行いその実態を明らかにした。ANCA関連血管炎の免疫抑制療法と感染症対策指針を作成した。 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義:血管炎モデル動物の感受性遺伝子が解明され、国際的に重要な学術的意義を得た。虚血性肢に対する遺伝子治療が行われ、難治性血管炎の新しい有効な治療が確立された。市販ANCA測定試薬の精度が明らかにされた。難治性血管炎患者の全国調査から疫学、臨床実態、QOL評価が行われた。以上、社会的意義のある成果を得た。	全国疫学調査から難治性血管炎患者の推定患者人数、臨床状態、予後が明らかになった。重症度分類の作成、QOL調査表の作成、臨床個人調査票の改訂をおこなった。ANCA測定試薬の精度を明らかにした。EBMに基づく治療指針・感染症対策指針を作成した。以上の内容を記載した「難治性血管炎の診療マニュアル(治療ガイドライン)」を全国の各施設に配布し、理解を深めた。	血管炎モデル動物により感受性遺伝子および血管炎の免疫学病態が明らかになった。重症難治性血管炎患者の関連遺伝子(HLA-DRB1*0801)が明らかになった。全国疫学調査から難治性血管炎患者の実態が明らかになった。治療のガイドラインを作成した。ANCA測定試薬の精度を明らかにした。これまで難治性であった虚血性肢に対する遺伝子治療を確立し、良好な成績を得た。	883	125	481	3件 申請中	1件(治療研究見直し、臨床調査票人数の改訂)	http://webat.niph.go.jp/
ベーチェット病に関する調査研究	平成11-13年度	90,000,000	横浜国立大学医学部(11,12年度)、北海道大学大学院医学研究科(12,13年度)	大野 重昭	ベーチェット病の責任遺伝子は第8染色体MICA遺伝子からHLA-B遺伝子間の48kbに存在する。その遺伝子を導入したトランスジェニックマウスおよび外因として重要とされる通眼球菌感染モデルを作成し、今後の治療研究にも応用可能な動物モデルを確立した。新しい治療では抗TNF-α抗体治療の高い有効性が示された。	ベーチェット病のQOL調査など今後の特定疾患研究の基礎となる研究を行った。また、新しいベーチェット病の治療薬として抗TNF-α抗体による治療研究を行った。さらに従来の疫学調査資料をもとに患者生命予後などの追跡調査を行った。		200	100	30	1件(ベーチェット病治療薬2000年11月21日)	なし	
ホルモン受容体構築案に関する研究	平成11-13年度	99,000	岡山大学大学院医歯学総合研究科小児医科学	清野佳紀	新規のリン調節因子であるFOF23のクローニングとその疾患とのかわかりを明らかにし、国内外で大きな注目を浴びている。また、ドナミン受容体研究においては、新規のノリガンドの発見とその意義など、また骨形成調節サイトカインIL-11の各種病態における関与など、いずれも国内外の反響は大きい。また、受容体共役因子と甲状腺癌に関する研究、パセドウ病の遺伝子、パセドウ眼症の病態についての研究が進んだ。	全国調査の結果をもとに低性調甲状腺機能低下症を含む甲状腺機能低下症の診断基準を作成した。このことにより、低カルシウム血症の診断が容易になった。これによって、副甲状腺ホルモン負荷試験が診断には必要ではなくなった。また、特殊な低カルシウム血症の過剰な治療による腎臓機能低下を予防できる可能性も示すことができた。パセドウ病の治療の進展しうる指標の開発、新規の眼症治療も治療の適正化に大きく貢献している。	パセドウ病は頻度の高い疾患で、この疾患感受性遺伝子を明らかにすることによって将来的には疾患発症の予防(少なくとも眼症の予防)は可能となり、この社会的インパクトは大きい。また同グループの共通テーマである膵内受容体の情報伝達機構に関する研究は、新たな疾患群の発見と新規の治療法開発につながる(ウイリアムス症候群の原因遺伝子の発見)。また、新規のリン調節因子の発見は新薬開発に直接つながりうるものである。	589	79	566	21件		

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 ・期待される厚生労働行政に対する貢献度等。(事例により説明してください。審議金資料、予算要求策定の基礎資料としての活用予定などを含む。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	発表状況			特許 特許の出願及び取得状況	施策 反映件数	(4) 研究の成果 が分かるホームページのURLなど	
								原著論文 (件)	その他論文 (件)	口頭発表等 (件)				
閉鎖下垂体機能障害に関する調査研究	平成11-13年	63,000	高橋医科大学	加藤 謙	抗利尿ホルモン、プロラクチンおよびゴナドトロピン分泌異常症、ならびに上記以外の下垂体ホルモン分泌異常を伴った複合性下垂体ホルモン分泌異常症を調査研究の対象とし、これまでの研究からとくに重要と考えられる病態の解明に基づく新しい診断法や治療法の開発を目的とした。対象疾患の臨床的観察、病態解明、免疫機序や遺伝子異常の解析、ならびに疫学調査を分担して施行し、これらを総合解析することによって、疾患の新しい概念、病態、診断や治療を確立した。総括して、最新の診断と治療の手引き(2001)を作成した。	QOLに影響する閉鎖下垂体機能障害の病態、診断、治療、予後を調査研究することは極めて大きな課題であり、長期的かつ継続的な研究が必要である。とくに、成人下垂体機能低下症の実態が明らかにされ、複合下垂体ホルモン分泌低下症において補償療法的重要性が明らかにされた。今後の重要課題は、QOLを考慮にいれた総合的なホルモン補償療法の確立であり、未解決の病態解明、正確な診断法や新しい国際的な治療法の導入に向けて不断の研究が不可欠である。また、欧米において承認されているホルモン治療が、わが国の保険医療において公認されていない点を早急に是正する必要がある。	成人下垂体機能低下症に対するGH治療の治験が進展した。脳ドックの普及によって、偶発的に発見される下垂体腫瘍(インシデンタローマ)のガイドラインが周知された。遺伝子異常による疾患の検査法が明らかにされた。	118	68	136	0		2	なし
中枢性摂食異常症に関する調査研究	平成11-13年度	64,000	京都大学大学院医学研究科内分秘・代謝内科学	中尾 一和	我が国における摂食調節機構の研究の飛躍的進展を踏まえて、レプチン系、グレリン系、オレキシン系、ヒスタミン系、CRF系、セロトニン系などによる摂食調節機構の解明と、中枢性摂食異常症の成因・病態に関する基礎的な解析が著しく進展した。一方、全国的規模の疫学調査の結果、我が国の中枢性摂食異常症の臨床像は、社会の変遷とともに変化し、重症化している実態が明らかになった。	全国疫学調査により我が国の中枢性摂食異常症の現状を正確に把握し、現状に即した中枢性摂食異常症の診断基準の作成作業に向けた準備が完了した。	国際的にも高い評価を受けてきたレプチン、オレキシンの研究成果に加え、グレリンの摂食調節機能の発見および中枢性摂食異常症患者における血中グレリン濃度が著増している事実の発見は今後の臨床応用の可能性を示唆するものとして期待される。	273	47	326	1		1	
原発性高血糖症に関する調査研究	平成11年度から13年度	73,000千円	京都大学大学院医学研究科	北 徹	今回の研究においては家族性複合型高血糖症(FCHL)の病態解明をすめるとともにその診断基準を改訂したことが最も大きな成果としてあげられる。この診断基準の作成により、FCHLを内臓肥満、シンドロームXのようなマルチプルリスクファクター症候群のように動脈硬化性疾患としての認識をさらに深め、この基準を元に病態に関与する因子の解析を進める予定である。また、小児における高血糖症を調査した結果、小児と成人では同じ遺伝的要素があってもその表現型には大きな違いが認められ、何らかの環境因子が遺伝因子に加わることで成人の表現型が完成される可能性が高いことが明らかになった。今後は小児期に発症する遺伝子による肥満代謝異常症の、その後の環境因子による変化の推移を小児期から成人まで追跡調査し、遺伝子と環境因子の相互作用を検討し、高血糖症と合併症との関連及び合併症を増悪させる要因を解析していく予定である。	この研究において行われた西暦2000年の日本人の血清脂質調査において、20歳代から40歳代の男性において中性脂肪値が10年前と比較し、増加していることが明らかになった。この結果は今後糖尿病、高脂血症などの生活習慣病が増加する可能性を示唆しており、行政上の対応に生かすことが期待される。	1960年から10年ごとに行われている西暦2000年日本人の血清脂質調査を行い、日本全国で約1万4千人のサンプルを測定した。1990年と比較して、総コレステロール値に関しては大きな変化が認められなかったが、若年男性における中性脂肪の増加が際だっており、今後の動脈硬化性疾患の増加が懸念された。	71件	17件	39件	0件		1	http://www.nanbyou.or.jp/siken/028.htm
アミロイドーシスに関する研究	平成11-13年度	98,000	信州大学医学部	池田 修一	ア) ALアミロイドーシスでは、その組織診断に有用な抗体が作成され、また末梢血幹細胞移植を併用したメルファラン大量療法が開発された。抗IL-6受容体抗体のAAアミロイド増進阻断効果が示された。FAPの疫学調査により、その遺伝子変異の多様性と心臓発生の重要性が明らかにされた。遺伝アミロイドーシスでは骨のう蝕の増大を抑制する薬剤が示された。マウス老化アミロイドーシスでは、アミロイド線維投与による発症促進効果が証明された。 イ) AA-ALアミロイドーシスおよびFAPには、根治療法が確立されつつある。また本邦のFAPの疫学調査は、その成果が米国内科神経学会の機関誌Neurologyに掲載された。	ALおよびAAアミロイドーシスに対しては、診断法の改良と新しい治療法の導入により、最終的な目的であるこれらの疾患の早期診断法と根治療法の確立へとつながる道筋を示すことが出来た。またFAPの生体幹細胞移植に關連してFAP患者の抽出肝を用いるドミノ移植に対して、研究班としての指針を示したことは、このような高度先端医療を遂行する上で生ずる倫理的・医学的な問題に的確かつ的確な指針を示したという点で意義が大きい。	マウス老化アミロイドーシスで、外部から授与されたアミロイド線維自体に同様の発症促進効果があることが示され、またこの発症促進効果はアミロイド蛋白質の種類が違って存在する可能性があることが示された。これらの結果は、アミロイドーシスの発症促進因子が細胞間で伝播する可能性を示している。従来、ヒトにおける細胞間の伝播が知られているプリオン病だけでなく全身性および脳アミロイドーシスにも伝播機構が存在するとするならば、そのことが与える社会医学的・予防医学的なインパクトは極めて大きい。	226	205	335	0		1	

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 ・期待される厚生労働行政に対する貢献度等。(実例により説明してください。寄附金資料、予算要求策定の基礎資料としての活用予定などを含む。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	発表状況			特許 特許の出願及び取得状況	産業 反映件数	(4) 研究成果 が分かるホーム ページのURLなど
								原簿 論文 (件)	その他 論文 など (件)	口頭 発表 等 (件)			
疫発性ウイルス感染に関する調査研究	平成11～13年度	196,000千円	東北大学大学院医学系研究科	北本哲之	●従来、ヒトプリオンの感染実験は野生型マウスを使って600日以上観察期間の後、20%の動物が感染するだけであったが、この研究期間にヒト型ラズジェニックを作成し、150日の潜伏期間で100%発病する世界最長のバイオアッセイ方法を確立した。 ●ES細胞を利用したヒト型ラズマウスを作成し、このマウスによってヒトプリオンの感染を14日で確認できるバイオアッセイ方法を確立し、知的所有権として申請した。もちろん世界最長のバイオアッセイ方法であり、しかもvCJDのプリオンにも有効である。	●複製移植体CJDやBSE由来のvCJDを常にフォローアップ可能なように日本のCJDサーベイランス・システムを確立した。また、公衆衛生審議会にCJD特別部会の委員を派遣している。 ●クワイツフェルト・ヤコブ病診療マニュアルを改訂し、全国に配布。 ●英国のCJDサーベイランスユニットにサーベイランス委員を派遣し、vCJD診療診断に関する報告書を平成14年1月に開催し、全国のサーベイランス相当医の教育と同時にこの報告書をマスコミを含め一般公開した。	●疫発性の開病したイム/アッセイ法が、平成13年のBSEの上陸の際、食肉用の金沢検査に役立つのは言うまでもない事実である。 ●イム/アッセイ法より感度が高いバイオアッセイ法は、従来その長期の観察期間ゆえ実用化は困難と思われたが、最短14日間で確認することができ、今後ヒトプリオンだけでなくBSEなど動物のプリオンの感染実験も迅速に行う方法論を示した。	英文 110 件	日本語 46 件	これは調査しておりませんでした。	4件	3件	特になし
神経変性疾患に関する研究	平成11～13年度	124,000千円	北海道大学大学院医学研究科神経内科学	田代邦雄	パーキンソン病(PD)の発症機序に関し、ARJP(PARK-2)におけるParkin 蛋白の細胞内局在と核移行を明らかにし、世界的に注目されている、札幌原地区の家族性PDの遺伝子座(PARK-8)を特定した。PD関連疾患の大脳皮質基底核変性症の発症機序と診断基準作成を行った。筋萎縮性側索硬化症(ALS)の肥田島の疫学、臨床調査を行い、パーキンソン病発症との存在を明らかにするなど、国際的な研究が展開された。また、現在までに効果的治療法のないALSに対し、メチルコバラミン大量療法が開発された。	PD、ALSおよびハンチントン病の特定疾患個人票の改訂、「発症の診断と治療指針」(六法出版社)の改訂、発病情報センターの医学講座の改訂を行った。本邦でのPD疫学調査、大脳皮質基底核変性症(CBD)の診断基準と実態調査を行いCBDが新たな特定疾患として位置づけられるべきことを検討した。本研究班員の夢園により日本神経学会PD治療ガイドライン(水野美和委員長)、ALS治療ガイドライン(田代邦雄委員長)が策定された。	PDの特定疾患申請数が多いため対策上問題が提起されてくる事については、CBDや進行性上性脊髄(PPSP)が含まれて申請されることも関与しており、厚生科学審議会第6回特定疾患個人票委員会に研究班・班長として、CBD,PPSPを新たな特定疾患として分類する事が社会的に必要である事を述べた。ALSに対するメチルコバラミン大量療法の臨床効果が認められ、欧米で臨床治療が開始されることになっている。	403 (英 文)、 17 (日 本語)	241	52	なし	3件	なし
免疫性神経疾患に関する調査研究	平成11～13年度	135,000千円	鹿児島大学理学部内科学第三講座	納光弘	(1)多発性硬化症、GBSの疫学調査から、本邦における病型の特徴が明らかとなり、治療戦略に重要な成果が得られた。(2)GBSの発症機序と抗ガングリオン抗体の関連が詳細に明らかになり、動物モデルの作成が成功した。(3)HAM、Isosens症候群、Crow-Fukase症候群、傍回神経性疾患における、それぞれの機能的抗原や遺伝子因子の解明が進み、発症機序が明らかとなった。(4)新たな疾患概念としてアトピー性脊髄炎の存在が明らかとなった。(5)重症筋無力症を多発性硬化症、GBSでは、治療法に関する調査が行われ、治療ガイドライン作成に大きく寄与した。いずれの研究も専門的国際誌に掲載され大きなインパクトを与えた。	多発性硬化症、GBSの疫学調査は、神経障害対策の基礎資料として、大きく行政に寄与すると考えられる。また多発性硬化症、重症筋無力症、GBS、CIDPIに対する治療法の研究ならびに、現在用いられている治療法の科学的根拠は、その治療法の標準化、ガイドライン作成に反映され、全国に普及しつつある。その他GBSと抗ガングリオン抗体、HAMにおけるHTLV-1、Isosens症候群と抗VGKC抗体、Crow-Fukase症候群とVEGF、アトピー性脊髄炎とIgE-好酸球などの標的分子の解明は今後の診断基準の改訂と正確な診断に基づく疫学的な資料の収集、神経障害対策の立案に重要な基礎資料となると考えられる。	GBSと抗ガングリオン抗体、HAMにおけるHTLV-1、Isosens症候群と抗VGKC抗体、Crow-Fukase症候群とVEGF、アトピー性脊髄炎とIgE-好酸球などの標的分子の解明は今後の診断基準の改訂と正確な診断に基づく疫学的な資料の収集、神経障害対策の立案に重要な基礎資料となると考えられる。	462	388	多数 (詳細 不明)	2件出願、1件取得	10件	特になし
ウイルス動脈硬化症の病因・病態に関する研究(H11-特疾-18)	平成11～13年度	87,000千円	東北大学	吉本高志	疫学病状に即した研究班患者全国調査カード改定版の意思を作成した。脳出血発症型に対する先行再発症の再出血予防効果の可能性を示し、全国規模の「出血発症成人もやもや病の治療指針に関する研究 - Japan Adult Moyamoya (JAM) Trial -」を開始した。病因遺伝子解析研究では、新たに Bq. 12p に連鎖を示唆する領域を抽出した。成果は Stroke, Am J Hum Genet などの雑誌に掲載され、研究報告書は海外にも配布している。	厚生労働省のデータソフトとの共有化に向けて研究班患者調査カードを改訂し、データソフトを作成した。診断指針の改訂が医療費に及ぼす効果を実証し、医療費削減に貢献していることを示した。研究成果に基づいて、治療ガイドラインを改訂した。疾患の地域的分布差の原因を遺伝子学的に説明し、多角的遺伝子解析が進行している。発病情報センターホームページに疾患情報を載せ、適宜更新しており、また、患者からの質問に対応している。	脳出血型の治療研究では、世界で唯一の日本全国規模の病態無作為無偏り分け試験が開始され、発表している。疾患の地域的分布差の要因と人類進化の歴史とを遺伝子解析により検証し、展開している。本症に対する大規模研究は、本研究班のものが世界で唯一である。	38	27	20	05: 発症の診断と治療指針1, 3 (疾病対策研究 編)、政府研究開発データベース登録、「特定疾患介入ハンドブック改訂版厚生労働省、厚生省特定疾患疾患対策事業「特定疾患に関する啓蒙」」との共通シンポジウム「出血発症成人もやもや病への対応」開催。	http://www.nanbyou.or.jp/shken/115shmtbz/	
前庭機能異常に関する調査研究	平成11～13年度	75,000千円	日本医科大学 医学部	八木 嘉明	メニエール病及び発症性内リンパ水腫の病因、診断基準、治療方針、予防法を明らかにすることを目的とした。内耳プロテオーム解析、遺伝子解析から病因解明に近づけることができた。治療法と予防法に関しては、活性酸素消去剤などの新しい方向性が見いだされた。成果は、多くの英文雑誌に掲載され、国内外から注目をあびた。	メニエール病の重症度分類が作成され、本疾患の治療や予後を考える上で重要である。本分類は、学会を通して専門会員に広く行き渡り利用されている。今後は、そのフィードバックを受けて改訂作業が必要である。長期に亘るメニエール病に疫学調査に、新たな資料の蓄積がなされ、今後の調査研究に重要な資料を残すことができた。	メニエール病や発症性内リンパ水腫の病因の一部が、最新のアプローチを用いることによって解明に近づいたことで、今後の治療の展開が見込まれている。	83 (内 英文 58)	19 (内 英文 13)	国内 138、 海外 81	なし	http://mhw.go.jp/	